

風土



墓 参 神 蔵 器

五十二代明珍風鈴鳴りにけり

何一つ置かぬ西日の机かな

法隆寺七星天道虫の発つ

七月の月に鬨あぐ烏骨鶏

甘酒の一本箸や舌を焼く

夏葱の煙のごとく生えそろふ

二千年中尊寺蓮開きたり

田水沸く母の行年四十九

墓参り墓に焚く火の涼しかり

東慶寺

カタカナの三行半やさるすべり

炎天の石に塩ふく草田男忌

太陽炎え岡本太郎爆発す



竹間集

同人作品



「淡交」以後(五十七)

野沢しの武

九月小旅付き添ひくるる妻をりて
終のおもひの妻との旅出雲は秋
妻のゐるそれだけの旅しみじみ秋
秋あかね母を迎へに外に出で^{道徳}
風の撫子姉三人のすでに亡く
梯子掛かり姿の見えぬ松手入
松手入昼のしづかな時過ぎをり

梅雨晴間

鈴木 石花

短夜のラジオに日本黄金史
激流を見下す宿や桜桃忌
万緑や丘のフランスレストラン
虞美人草フラメンコショウ席満たす
梅雨晴間傘寿三十人合唱す
二人して健診ドック冷房裡
さくらんぼ二人の健診異常なく

母の日

山路 紀子

母の日や小枝を啣へ鳩の翔つ
サーカスの象の直立聖五月
過疎村に若き一家や桐の花
空海の杖の先より泉湧く
初夏のさぬきぶつかけうどんかな
チューリップ大欠伸してをりにけり
母の日のまづ宇治茶より開けにけり

あはあはと

岩木 茂

千年樹育てあげたる滝涼し
見て来たる滝の話をして下る
美山なる小粒がよかり青山椒
篆刻の陰陽飾る夏山家
風鈴の音色を飾る美術館
一番刈り終る茶垣や仁清みち
あはあはと樗の花や「いのちの碑」

風容るる

相沢有理子

無器用に鈴蘭抱き次男来ぬ
飛行音消えて下弦の月涼し
下校児の頭上に猛る梅雨鴉
往診医去りて枇杷むく昼下がり
旅程組むキャンピングカー整へて
風容るる寢室好きなピサ口の絵
うすものの母似の姿見返りぬ

姫女苑

小林 輝子

あとずさり津波のがれし寺隅に
眼閉ぢ犇めきあへる燕の子
日を返しつつ錆びにけり朴の花
姫女苑もう生るると言ひつつ抜く
草鉄砲撃ちつつ青き山に入る
滝に佇ち己の言葉探しけり
木下闇くぐり水音高くなる

落し文

小野寺節子

挨拶のごとく羽ばたき鳥帰る
胸中の時計に螺子巻き種おろす
人生の旅の袂に落し文
雨乞か老農畦に土下座して
里山の声きこえくる雨祝
老鶯に哀楽ありや今見ゆる
吟行の行程を組む麦の秋

イタリア紀行

中村 洋子

立夏かな北ウイングに集合す
正面にアペニン山脈雲の峰
夏帽子ミラノ大聖堂に脱ぐ
一塊のやうにピエタ像さくらんぼ
穴惑まどひつ螺旋階段へ
朝曇り一氣に登るピサ斜塔
梅雨寒し「ため息橋」の行き帰り
広場よりフィレンツェ望む新樹光
教会にカラバッチョの絵涼しかり
レオナルド・ダ・ヴィンチ空港大虹

山河集

同人作品



神蔵
器選

早苗饗のをとこ古事記を読めと言ふ
生田 作

緑陰に空の破片を浴びぬたり
蕨野や因幡の人の遠会
積書割に熟るるゴッホの麦畑
噴水や風掌をひるがへし

校庭に白線一本麦の秋
近藤幸三郎

天に星地に十葉のしじまかな
情念の揺れとも風の白牡丹
掌に乾く陶土やあいの風
夜目に美し石に命の苔の花

湯けぶるに山気入れ替ふほととぎす
福田 鳳草

この暑さ稲の分蘖真つ盛り
那珂川に太公望や雲の峰

鮎釣つて足半すべる箒川
舟着けて中州に咽ぶ草いきれ

螢火のひとつに先づはもてなされ
小林 和子

虞美人草川に水無き日の続く
日光黄菅霧の匂ひの旅愁かな
鬼女の里裾花川へ藤懸くる
辰雄忌や閉ぢて久しき茶房「四季」

葉の艶の増すや泰山木の花
柿沼 盟子

青梅雨のにほひのなかの六義園
屈まずに使ふ靴篋夏至きのふ
切りたての爪の硬さや麦の秋
交差点のコントラストや六月来

◇特別作品◇(抄)

朱夏

上村 葉子

喉すべる葛切り銀座四丁目
轟きし雷鳴に本閉ぢにけり
ハングルの瓶流れ着く夏の浜
香水を小指の先で耳朶に
半夏生ふたりの膳の米一合
ソーダ水手紙の返事待つ日かな
峰雲に届きて戻る観覧車
炎昼や音をこぼさぬ楽器店
朱夏の夜や『ジョン万次郎漂流記』
伝道の若きら朱夏に集ひをり

風土独語／神蔵器



書割に熟るるゴッホの麦畑

生田 作

されば、これはゴッホ、その人の人生劇場の書割ではなからうか。南仏アルルの明るくかがやく太陽、美しい風土は、彼に心機一転、画業も大いに進んだ。『ひまわり』『はね橋』など、彼はここで十五か月で二百点以上にもおよぶ絵を画いている。

しかし、アルルでの多産で幸福な日々は、そう長くは続かなかつた。ゴーガンとの不幸な事件を起こしてしまった。アルルでの幸せな日々は一瞬にして破れ、ゴーガンは去り、ゴッホは再び孤独にもどり、幻覚症状に襲われ、精神病院に入っていたりしていた。

しかし、絵はさらに充実し、力強さを増し『糸杉』は立ちのぼる黒い炎のように天に向かい、『麦畑』は生きもののように渦巻き、波打って描かれた。

一八九〇年七月、ゴッホはオーベルに帰っているが『鳥の群れとぶ麦畑』が最後の作品になった。多分この絵であったと思うが、ゴッホは、レンブラントの『ラザロの復活』を模写しているが、原画にはない巨大な太陽を描き入れている。

生田さんの掲出句は、「熟るるゴッホの麦畑」の「熟るる」に千金の重みがある。

この暑さ稲の分蘖真つ盛り

福田 周草

稲の分蘖は品種、および栽培方法によっても異なるが、普通、七―二十ぐらいの節がある。そのうち四―六節は伸びて稈となり、他の十節内外は地中であつて節間伸長はしないため密接した状態にある。この密接した節に冠根、および芽が形成され、この芽が成長して分蘖、すなわち枝を生じる。なお、同一の節からは一本の分蘖が生じるだけである。

稲の分蘖はだいたい出穂期の四十日前頃までの分蘖が有効である。つまり田植え後十日頃からふえはじめ七月が最盛期である。この間、稲に必要なものは水、肥料、そして何より大事なものが日照である。

今日では田草取りは機械か除草剤であるが、私たちの子供の頃は腰を二つに折り、両手を使って田草取りをした。これは稗、その他、雑草を取ることほもちろんであるが、本当の目的は稲の分蘖をうながし促進させることで、真夏によく晴れた沸きかえるような熱い田の中に入って、水底をかき回し、特に稲の根元の冠根にも太陽のいっぱいあつた暖かい土や酸素、水を入れ替え供給してやることである。

なお、稲の収穫は、各分蘖に一個ずつの穂が形成されるから、分蘖の数の多少が穂数を規定する。今年の暑さは格別だが、稲にとっては頼母しい。(以下略)

風土集



神蔵器選

目に見えてより一本の今年竹 津山 生田恵美子

たかなの一夜に現るる井戸の端

耳元に振るほほづきの青き音

緑蔭にためらひ押して人と会ふ

一条のどこにも触れず滝落つる

羽抜鶏空飛ぶ夢もありにけり

鱒飛んで大水輪の重なれり

衣更するたび母の小さくなり

水中のロダン歩きや梅雨晴間

抽斗にへその緒三つ土用干

汲み置きの水の平らや明易し

潮に乗る水母を入るる運河かな

虹消えて雲の速度の増しゆけり

青梅雨の堀に灯の影水の蔭

夏帽子手に切り出せし話かな

阿南 島 玲子

東京 柿沼 盟子

たましひのよりそふゆふべ白あぢさゐ 京都 杉本葉子

「八百三」の柚子味噌を載せ冷奴

金魚草男に育児休暇あり

ががんぼや武徳殿の床に立つ

緋目高の涙に水嵩少し増え

袈裟懸けに馳せくる騒雨城跡攻め

弓弭湧き梅雨に抱かれし賢治川

解き難き盲絵 暦半夏生

柿若葉少女の背すぢばね持てり

七変化彩を配りて過ぐる雨

浜茶屋の松風に座す心太

竹生島に着きて候ふほととぎす

徳川の四公六民栗の花

生かされて六月二十日の風に遇ふ

髪洗ふ幽かな音や蛍の夜

麗を憶ふ

盛岡 石崎 浄
舞鶴 福田 周草